

2011(平成 23)年度 事業報告及び附属明細書

公益財団法人国際文化フォーラム



公益財団法人に移行して初年度であった 2011 年度につきましては、これまで TJF が複数年にわたって継続してきたいくつかの事業の成果をかたちにし、世に問うことができました。そのひとつは、中国大連市教育学院と共同制作した、中国ではじめての第二外国語としての日本語教育用教材『好朋友』を中国全国に拡大することをめざして制作した「好朋友ウェブサイト」です。もうひとつが、6 年の歳月をかけて研究開発してきた、日本の高等学校における中国語と韓国語教育の教育理念・教育目標・学習内容と教育方法をまとめた冊子『外国語学習のめやす ―高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』の発行でした。

いずれも、外国語学習は単なる道具としての言語の習得を目標とするものではなく、「多様なことばと文化的背景をもつ人たちが共生する 21 世紀の社会を生きぬく力」を育てるものである、という新しい提案をしています。

また、2011 年度は、中国語を学ぶ日本の高校生と日本語を学ぶ中国の高校生のサマーキャンプを実施し、共同生活や協働学習を行う過程で、ことばで表現する力、相手と意見を調整する力、新しい価値観を生み出す力などを身につけることをめざした交流プログラム開発にチャレンジしました。

これらの事業をはじめ、4 つの公益目的事業別に 2011 年度の主要事業をご報告いたします。

公1 海外の小中高校における日本語教育と日本の文化についての理解を促進する事業

■ 二外日本語教育の拡大

―東北三省から中国各地へ―

2009 年度に完成した『好朋友』(5 巻)を使った第二外国語(二外)としての日本語教育を中国全土に広げるため、2010 年度から東北三省(吉林省、黒龍江省、遼寧省)の教育行政機関への働きかけを始めました。その一環として実施しているのが、各省の教育行政者や校長の招聘です。2011 年度は、吉林省と遼寧省の教育代表団を日本に招聘し、日本の学校を訪問し教育関係者や生徒と意見交換を行うとともに、都内見学や買い物体験等を通して、日本や日本人に対する理解を深めてもらいました。そのことが、二外日本語の新規導入や学校内での二外日本語学習者の増加につながりました。二外を担当している教師を対象とした研修を実施し、具体的な実践を報告してもらうことを通して、『好朋友』が提案する新しい外国語教育の考え方の共有にも努めました。

東北三省以外の地域で広く『好朋友』を使ってもらうことをめざして、「好朋友 WEB」を制作し 11 月にオープンしました。ウェブサイトには、授業案や教師用指導書など、教師サポート情報を多数掲載しているほか、中国の若い人たちが、『好朋友』に掲載されているストリーマンガ「大連物語」を読むことを通して、日本や日本語、そして日本の中高校生に出会えるように、マンガの台詞を日中で切り替えられたり、音声を聞けるようにしたりなどの仕掛けをしています。

■ メナーシャ合同学区に対する日本語教育支援

－小中高校一環の日本語教育の拠点を維持－

米国内でも有数の小中高校一環の日本語教育を実施している、米国ウィスコンシン州メナーシャ合同学区への3年間にわたる財政的支援(野間佐和子記念寄付金、講談社の特別寄付金による)の初年度の寄付を実施しました。同学区は、この寄付金を使って、日本語学習者の米国内における日本体験、オンライン日本語コースの開講、日本語学習支援ウェブサイトの開設、日米間の生徒交流の実施を予定しています。

日米間の生徒交流を継続的に実施するためには、その相手校や相手教師の存在が不可欠であるため、2012年3月には小中高校の日本語教師および小学校の校長を招聘し、それぞれの交流相手の候補となる学校5校を訪問してもらいました。いずれの学校も交流に対して積極的な姿勢を見せており、今後の発展が期待されます。

公 2. 日本の小中高校における外国語教育と多様な文化についての理解を促進する事業

■ 「外国語学習のめやす」の完成

－つながりの実現をめざした外国語教育の提案－

2006年に高校と大学の中国語と韓国語教師を中心としてプロジェクトチームを立ち上げ取り組んできた、高等学校の中国語と韓国語の学習目標、内容、方法」の研究成果を『外国語学習のめやす－高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』として発行しました。「めやす」が提案する外国語教育をひとつでも多くの教育現場で取り入れてもらえるよう、同冊子

を全国で中国語と韓国語を実施している学校(それぞれ800校と400校)、各都道府県教育委員会、中国語と韓国語教員養成課程を持つ大学に配布しました。ウェブサイト等で広報した結果、両言語の教育に携わる大学の教員、中国語と韓国語以外の外国語を担当する教員からも冊子の希望が予想以上に多く寄せられており、「めやす」に対する関心が高いことがわかります。

「めやす」の完成を記念して、2012年3月に上智大学と共催したシンポジウム「未来(あす)を生きぬく外国語教育に挑む」は、会場の定員である200名近くの参加者を得ての実施となりました。外国語教育が抱える課題、これからの外国語教育がめざすべき方向性を確認するとともに、その実現に向けて何をすべきか、何ができるのかを分科会で議論し、参加者間で共有しました。

日本の外国語教育を改善するためには、外国語教育関係者の全国ネットワークづくりが必要であるという参加者からの提案に対しては、本シンポジウムがきっかけとなり、具体的な組織づくりに向けた動きが始まっています。

公 3. 国内外の小中高校生間と教育関係者間の交流を促進する事業

■ ICTを使った交流学習のモデルづくり

－協働のためのプログラム開発－

2011年度は、沖縄、大阪、台湾等の高校教師が実施する「異なる背景をもつ同世代とコミュニケーションする力、協働する力およびICTリテラシーの育成をめざした外国語教育のモデルづくり」の実践研究に協力しま

した。1 年にわたる実践では、SNS システムによる「つながる」を通しての意見交換やスカイプを使って 3 地域をつなぐテレビ会議など ICT ツールを積極的に使いながら、三つの地域のつながりのよさ、深さ、豊かさをそれぞれの地域の人々に伝える CM を日・英・中の三ヶ国語でつくる作業に行いました。

CM づくりを取り入れた活動ははじめての取り組みでしたが、プロの CM プランナーをファシリテーターに迎えてワークショップを実施できたことで、互いにアイデアを出し合い、人と意見を調整しながら、ひとつのものを作り上げていく「協働」のプロセスを自然に組み込むことができました。

■互いのことばを学ぶ高校生交流の実施

TJF は、2007 年度より中国語学習者のためのプログラムとして「漢語橋：日本の高校生のサマーキャンプ」を毎夏実施してきました。2011 年度は、同じ時期に同じ会場で「日本語橋：中国の高校生のサマーキャンプ」を実施し、日中の高校生がことばの学習だけでなく、共同生活や協働学習を行う過程で、ことばで表現する力、相手と意見を調整する力、新しい価値観を生み出す力などを身につけることをめざしました。

日本の高校生 92 名と中国の高校生 46 名は、会場となった長春日章学園高校の寮で共同生活を送りながら、コミュニケーションできる中国語・日本語の習得をめざした授業のほか、学んだことばを使って買い物体験をし

たり、中国の高校生の家庭を訪問したりしました。最終日には日本語を学ぶ日章学園高校の生徒を招いて実施するサマキャン文化祭を設定し、そこに向けての企画から実施までに取り組みました。

最初はことばも十分通じない中でどうやって意思疎通するか戸惑ったりすることもありましたが、何とかコミュニケーションをとろうと格闘するうちに、わかりやすい表現を使ったり、身体を使って表現したり、実物を使って例示したりと、伝えるための新たな方法を体感し、コミュニケーションの引き出しを増やしていきました。また、ことばを学ぶこと自体の意味を見出した生徒もいるなど、参加者の感想からそれぞれに学びがあったことが伺えました。いるなど、参加者の感想からそれぞれに学びがあったことが伺えました。

公4. 広報活動

■ファンドレイジングをめざした広報資料『であい、つながる』の発行

より多くの人たちに、TJF のミッションをわかりやすく伝え、共感をしてもらうことをめざし、これまでの事業を通じて出会った 7 つのエピソードをまとめた新書『であい、つながる』を 2000 部発行しました。昨年度に新規作成したパンフレットとともに、これらの資料を活用して、寄付を含めて TJF の活動に参画してくれる人を増やしていきたいと考えています。

2011 年度実施事業の一覧及び各事業の報告

公 1 海外の小中高校における日本語教育と日本の文化についての理解を促進する事業

1. 中国東北三省教育代表団の日本招聘(定期事業)
2. 第二外国語教育用日本語教材『好朋友』のフォローアップ(定期事業)
3. 遼寧省小学校日本語教科書『小学日語教材』の出版協力(継続事業)
4. 日本の文化と人びと紹介サイト「くりっくにっぽん」の運営(定期事業)
5. 海外の日本語教師向け情報誌の発行とサイトの運営(定期事業)
6. 二外日本語教師研修(好朋友ワークショップ)の共催(定期事業)
7. 米国ウィスコンシン州メナーシャ地区日本語教育支援(新規事業)
8. 日本語教育・日本理解事業に関するネットワーク活動(定期事業)

公 2 日本の小中高校における外国語教育と多様な文化についての理解を促進する事業

1. 日本の教育代表団の中国派遣(定期事業)
2. 高校の中国語と韓国語の学習のめやす制作(継続事業)
3. 中国語・韓国語教育関連情報提供サイト「Ringo」の運営(新規事業)
4. 高等学校中国語韓国語教師研修の共催(定期事業)
5. 高等学校中国語教師研修の共催(定期事業)
6. 学習のめやす完成記念シンポジウムの開催(25 周年記念事業)
7. 外国語教育・多文化理解事業に関するネットワーク活動(定期事業)

公 3 国内外の小中高校生間と教育関係者間の交流を促進する事業

1. 世界の中高校生の交流プログラム「つながる」の実施(定期事業)
2. 日中の高校生のサマーキャンプの実施(定期事業)
3. 交流事業に関するネットワーク活動(定期事業)

公 4 広報活動

1. 機関誌『国際文化フォーラム通信』の発行とサイトの運営(定期事業)
2. TJF の事業報告と広報資料の作成(定期事業)
3. TJF のウェブサイトの運営(定期事業)

■ 2011年度事業報告(事業別)

公1 海外の中小高校における日本語教育と日本の文化についての理解を促進する事業				決算額: 39,505,222円 (内、公1共通費用 25,123,984円)
事業名	実施時期	実施場所	事業内容	関係機関/団体
1 中国東北三省教育代表団の日本招聘 (定期事業) 決算額: 2,488,969円 (予算: 3,034,950円) 減少理由: 先方都合による招聘期間短縮、ANA 協力により航空券代減少	①11月28日-12 月3日 ②2月19-23日	東京ほか	第二外国語としての日本語教育(以下、二外日本語)の中国各地域への拡大と浸透をめざし、東北三省(吉林省、黒龍江省、遼寧省)を中心に、二外日本語教材『好朋友』を使った日本語教育を実施している中学校の校長および各地の教育行政者を昨年度に続き日本に招聘した。滞在中、中国語教育実施校や特色のある教育を実施している学校を訪問し、教育関係者や中国語学習者、中国籍の生徒と意見交換や交流などを行った。そのほか観光地の見学や買い物体験など、できるだけ日本人の生活に触れてもらうように心がけた。これらの活動を通じて、代表団メンバーの日本の教育・社会・文化に対する理解が深まるとともに、日本語教育への関心を高めることができた。招聘した校長の学校では新たにクラブ活動で日本語が開講されたり、二外日本語の授業を選択する生徒が増えるなど成果が上がっている。 ①吉林省教育代表団(吉林省教育学院院長、二外日本語教育導入モデル校校長など計6名) ②遼寧省教育代表団(日本語指導主事、二外日本語教育導入モデル校校長など計9名)	助成: 三菱UFJ国際財団
2 第二外国語教育用日本語教材『好朋友』のフォローアップ(定期事業) 決算額: 2,022,964円 (予算: 2,968,795円) 減少理由: モデルカリキュラム開発を2012年度に変更	通年	東京ほか	『好朋友 ともだち』(2009年秋、全5巻完成)を広く中国で使ってもらうために、「好朋友Web」を制作し、11月にオープンした。ウェブサイトは以下の5つのコーナーから構成されている。2011年度は第1巻の日本語サイトが完成。今後は中国語サイトを制作するとともに、2-5巻についてもコンテンツづくりを進めていく。 ①漫画「大連物語」 漫画の台詞を日中両言語で閲覧したり、音声を開ける。擬音語や擬態語の説明を漫画のコマ上で閲覧できるように仕掛けも取り入れた。 ②「Enjoy マンガ!」マンガの背景にある日本の文化や中学生の学校生活や日常生活を紹介 ③「かんたん日本Go!」マンガに出てくる簡単な日本語を独学できる。 ④「世界の中高生に会おう!」日本語を学んでいる世界各国の中学生を紹介 ⑤「先生たちの『好朋友』」各課の付属資料などの教師サポート情報を掲載。 『好朋友』モデルカリキュラムの開発を予定していたが、二外日本語の授業の形式は、正式な授業、総合的な学習の時間、クラブ活動など多様であり、また、中学校だけでなく高校にも広がっていることがわかった。これらを代表するいくつかのタイプのモデルカリキュラムの開発は、実施状況を踏まえて行ったほうが良いこと、開発を担当する教師が最低でも1年以上授業実践を行ってからのほうが良いことを考慮し、モデルカリキュラム開発は2012年度実施に変更した。	助成: 三菱UFJ国際財団
3 遼寧省小学校日本語教科書『小学日語教材』の出版協力(継続事業) 決算額: 966,850円 (予算: 967,125円)	通年	中国瀋陽市	中国の小学生向けの日本語教材は大連市教育学院が1989～1994年に制作した試行版の教材しかなかった。小学校への外国語教育の導入に伴い、教材が揃っている英語教育への移行が始まる中、2008年度に遼寧省基礎教育研究教師研修センターが新たな小学校向け日本語教材の制作に着手。TJFもそれに協力してきた。2010年度に1年生～6年生までの教科書が完成。東北三省の33校で7,500人がこの教科書を使っている(2010年現在)。2011年度は第6巻の教科書付属の音声教材(CD)を制作。これで6年間の学習に対応する教科書および音声教材が揃ったこととなり、中国全土での小学校日本語教育の拡大が期待される。	主催: 遼寧省基礎教育研究教師研修センター 助成: 尚友倶楽部 協力: TJF
4 日本の文化と人びと紹介サイト「くりっくにつぼん」の運営(定期事業) 決算額: 1,987,260円 (予算: 3,867,600円) 減少理由: サイトのリニューアルオープンを2012年度に変更	通年	TJFサイト	日本語教育に携わる人や日本に興味をもつ人を対象に、現代日本を文章と写真で紹介するとともに、それらの記事を活用した日本語のクラスアイデアを日英中の3言語で紹介。これまでは日本語教師向け情報誌『Takarabako』『ひだまり』の記事を中心に掲載してきたが、情報誌を休刊し、日本に関する情報発信を「くりっくにつぼん」に一本化した。 インターネットの特性を生かすこと、国内外の中高校生が見ても楽しめるサイトにするを目標に、後述する「つながる」と同じメンバーでアドバイザーグループをつくり、アドバイスをもらいながらサイトのコンセプトづくりに取り組んだ。2011年度に予定していたサイトリニューアルの作業そのものは、2012年度に行うこととした。	
				*各公益目的事業に係る費用(給料手当、福利厚生費、消耗品、賃貸料など)

5	海外の日本語教師向け情報誌の発行とサイトの運営(定期事業) 決算額:2,433,256円(予算:3,215,329円) 減少理由:特集内容による翻訳代の減少、トップページのリニューアルを2012年度に変更	6月、9月	英語圏、中国、TJFサイト	英文情報誌『Takarabako』、中文情報誌『ひだまり』の発行(A4判、4色、8頁)。発行部数は、それぞれ6,000部、1,900部。主に海外の小中高校の日本語教育現場に送付するとともに、PDF版をTJFサイトに掲載してきた。毎号海外の小中高校生が関心をもつ話題を取り上げ、現代日本事情・文化と、その話題に関わる日本の小中高校生を紹介。 これまで年4回発行してきたが、近年のインターネットの普及や技術の進歩により、ウェブサイトでの情報提供方法の可能性が広がったことを踏まえ、両誌とも9月発行の号をもって休刊し、情報発信を「くりつくとっぼん」に一本化した。 6月号は「お弁当」を取り上げ、最終号はこれまでに何を取り上げたのかを振り返った。 また、これまで両誌の「Japanese Culture Now」と「今日日本」に掲載してきた記事を今後も活用してもらうため、それぞれテーマ別(日常生活、余暇とスポーツ、社会と教育)に3冊のe-bookにまとめ提供した。	
6	二外日本語教師研修(好朋友ワークショップ)の共催(定期事業) 決算額:1,386,711円(予算:2,368,590円) 減少理由:効率よく進出し、中国出張回数、現地経費等が減少	12/23-25	中国大連市	二外日本語教材『好朋友 ともだち』(全5巻)を使った二外日本語教育を東北三省内で拡大していくためには、『好朋友』が提示している教育理念や内容、第二外国語教育の目的や方法を教師間で共有することが必要である。その目的を達成するため、各省の教育学院と共催でワークショップを実施している。2011年度は、遼寧省瀋陽市で開催し、東北三省から約70名の教師が参加した。 3日間の研修の初日は、東北三省で二外日本語を教えている教師を対象とし、『好朋友』を使った授業の実践報告を3名の教師に行ってもらい、意見交換をした。2、3日目は、一外、二外を含めた日本語教師を対象にし、日本語教育の意義や目的についてグループごとに意見交換しそれを全体で共有したうえで、その目的を達成するための学習活動を実際にグループで作成した。 教師の多くが学習者の動機付けを課題としていることを踏まえ、参加した教師がすぐに実践できる活動(ラジオ体操、カルタづくり、おにぎりづくり、日本語なぞなぞ等)を複数体験してもらった。 実践的な内容だったこと、また改めて外国語(日本語)教育の意義を考え、自分の授業を振り返ったことは、参加者にとって得ることが大きかった。	主催:遼寧省基礎教育研究教師研修センター、TJF 助成:三菱UFJ国際財団
7	米国ウィスコンシン州メナーシャ地区日本語教育支援(新規事業) 決算額:2,476,011円(予算:2,960,670円) 減少理由:教育代表団の来日が年度末となり、一部費用を2012年度で精算	①7月 ②3/31-4/6	①米国メナーシャ市 ②東京、高知	米国ウィスコンシン州メナーシャ合同学区は、幼稚園から高校3年まで一貫した日本語教育のカリキュラムにもとづいて授業を行っている米国でも稀有な地域である。初等中等教育における日本語教育の拠点である同地区で日本語教育を存続、発展させるためにTJFはこれまでも協力を行ってきた。 2010年度の学区の教育長等の日本招聘時に意見交換を行った結果、同学区が推進する「21世紀のスキルの育成をめざした日本語教育プログラム」に対し、2011年度から3年度にわたり、野間佐和子記念寄付金(講談社の特別寄付金)として年額200万円を寄贈することとなった。 学区はこの寄付金を使い、オンライン日本語コースの開講、日本語学習支援ウェブサイトの開設、プロジェクト型学習カリキュラムの開発、日米の生徒の交流の実施を計画している。初年度となった2011年度は、新年度が始まる7月にメナーシャで寄付金贈呈式を行うとともに、日本語教育を実施している小学校校長と小中高の日本語教師3名を日本に招聘し、交流相手の候補校を訪問し、具体的なプログラム実施に向けた準備を行った。	①特別寄付:講談社 ②助成:商友倶楽部
8	日本語教育・日本理解事業に関するネットワーク活動(定期事業) 決算額:619,217円(予算:1,794,000円) 減少理由:ACTFL及び日本語教育学会秋季大会参加中止による交通費や会議費の減少	通年	埼玉、鳥取ほか	日本語教育学会春季大会(5月・埼玉)・秋季大会(10月・鳥取)、日本語教育国際研究大会(ICJLE、8月・天津)をはじめ、日本語教育関連の大会・研究会・会合に参加し、関係者とのネットワークを図った。	

公2 日本の小中高校における外国語教育と多様な文化についての理解を促進する事業					決算額:41,294,861円 (内、公2共通費用 24,799,389円)
事業名	実施時期	実施場所	事業内容	関係機関/団体	
1 日本教育代表団の中国派遣(定期事業) 決算額:1,472,672円 (予算:2,528,725円) 減少理由:参加者が計画より下回ったため、航空運賃が減少。ただし、事業収益もその分減少	11/22-26	中国 ハルビン市	高校中国語教育の定着と拡大のためには、各都道府県教育行政者や学校の管理職の理解と支持が必要である。これら関係者の中国理解を深め、中国語教育に対する関心を喚起するため、2008年度から中国国家漢弁の主催で、中国への派遣事業を企画・実施し、2010年度までに42名を派遣した。2011年度には国家漢弁とTJFの間で中国語教育促進のために向こう3年間にわたり3つの事業を実施する旨の協議書を結んだ。本事業はそのうちの一つ。 2011年度は参加者を全国公募した結果、北海道から沖縄までの12都道府県から17名が参加した。派遣先のハルビン市では、黒龍江省教育庁をはじめ、私立の小学校、課外活動として日本語を実施している漢族の中学校、中高一貫の朝鮮族学校など、さまざまなタイプの学校を訪問し、管理職と意見交換したり、児童・生徒と交流した。 今回を含め、参加した校長の学校では、休講していた中国語講座が復活する、新たに中国語が開講されるなど、成果があがっている。	主催:中国国家漢弁 実施:TJF 助成:在日本中国大使館教育処 後援:在日本中国大使館教育処、在中国日本大使館、在瀋陽日本総領事館 協力:文部科学省 輸送協力:ANA	
2 高校の中国語と韓国語の学習のめやすの制作(継続事業) 決算額:7,415,749円 (予算:9,810,125円) 減少理由:冊子掲載予定の原稿をウェブ掲載に変更したため、印刷経費減少。ダイジェスト版は日本語版のみに。冊子発送代支払は2012年度に精算	通年	東京	2006年度から2007年度にかけて文部科学省の委嘱事業として、高校における中国語と韓国語教育の目標・内容・方法を研究し、2007年3月に『高等学校の中国語と韓国朝鮮語 学習のめやす(試行版)』を発表した。その後、研修等を通じて、全国の教師と「学習のめやす」の共有を図るとともにフィードバックを得た。2009年度に新たなプロジェクトチームを立ち上げ、「学習のめやす」完成に向けての作業を行ってきた。 2011年度は9月にダイジェスト版(A4判/4色/16ページ/4000部)を発行し、「めやす」のキーコンセプトを両言語の教育に携わる教師に伝え、関心を高めることをめざした。2012年3月には、「めやす」の理論および「めやす」の考え方を取り入れた授業設計の方法を収録した『外国語学習のめやす2012—高等学校の中国語と韓国語教育からの提言—』(A4判/2色/112ページ/5000部)を発行し、全国で中国語、韓国語を実施する学校の校長、両言語を担当する高校および大学の教員等に寄贈した。 「めやす」の考え方を取り入れた授業サンプルおよび学習内容例については、2012年度にウェブサイトで公開すべく編集作業を行った。 また、「めやす」の発表にあわせてシンポジウムを実施し、これからの外国語教育のあり方について参加者とともに考えた。	助成:東京倶楽部、かめのり財団	
3 中国語・韓国語教育関連情報提供サイト「Ringo」の運営(新規事業) 決算額:66,300円 (予算:548,000円) 減少理由:アルバイト代をWebページ制作にて費用処理、新規ページデザインなし	通年	TJFサイト	中国語教師向け情報誌『小溪』(1999-2010)と韓国語教師向けの『隣語通信』(2009-2010)およびウェブサイト「小溪」「隣語」を通じて行ってきた、高校の中国語教育、韓国語教育に関する情報発信を一本化した「Ringo」ウェブサイトを6月に開設した。 中国、韓国の文化を写真とエッセイで紹介する「注目の1枚」、現場教師の活躍や思いを紹介する「先生の輪・話・和」、高校から中国語や韓国語を学び世界に飛び出そうとする「先輩たち」を紹介する「先輩につづけ」のコーナーで記事を掲載している。 中国語、韓国語教育に役立つ情報を発信する「Ringoメルマガ」の登録者数は470名を超え、日本の高校の中国語、韓国語教師の想定数800名の半数を超えている。		
4 高等学校中国語韓国語教師研修の共催(定期事業) 決算額:3,757,207円 (予算:4,302,788円) 減少理由:講師等の旅費交通費節減、印刷代節減	7/30-8/3	東京	TJFが開発している「学習のめやす」の基盤となっている外国語教育の理論と実践方法を全国の中国語、韓国語をはじめとする外国語教師と共有し、活用してもらうことを目標とする研修の3回目を、當作靖彦氏(米国カリフォルニア大学サンディエゴ校教授)を主任講師に迎えて実施。 前半2日間は、すべての外国語教育関係者を対象とし、初参加者とリピーター向けのクラスを設けた。初参加者クラスは、當作教授が外国語教育の目標設定・内容・方法についての考え方や、学習者がコミュニケーション能力を獲得するための授業に関する講義を実施。リピータークラスでは、日本の高校の中国語の韓国語の授業のビデオを見て、「学習のめやす」のキーコンセプトに基づいて授業分析を行うとともに、各自の授業を振り返るワークを行った。 後半3日間は、中国語と韓国語の教師のみが対象。テーマは「テキストブック・アダプテーション」とし、授業で使用する教科書の分析、「学習のめやす」の考え方を取り入れるための教科書の活用法の検討、授業案の作成をグループワークとして実施した。各グループが作成した授業案はポスターにまとめ、全員と共有し、意見交換を行った。 研修会会期中の7/31には、ミニシンポジウム「21世紀の外国語教育を考える」を開催し、中国語、韓国語、フランス語、スペイン語、英語教育、(海外の)日本語教育の立場から、外国語教育の意義とそれぞれの実践を発表してもらった。研修生以外の参加も得て、中・韓・英・仏・独・露・西・日の各言語教育に携わる120名が参加した。	共催:桜美林大学 特別共催:在日中国大使館教育処、駐日韓国大使館韓国文化院、駐日韓国文化院世宗学堂 後援:文部科学省 協力:高等学校中国語教育研究会、高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク	

5	高等学校中国語教師研修の共催(定期事業) 決算額:309,034円 (予算:457,310円) 減少理由:中国出張の日数が減少、旅費交通費減少	7/24-8/5	中国長春市	中国教育部、文部科学省、中国国家漢弁、TJFの共催で、2004年から5ヵ年計画で始まった高校中国語教師の中国研修。中国語のコミュニケーション能力の向上と教授法習得、中国語文化理解を深めることをめざす。第5回終了後もニーズがあったことから、漢弁と協議の上、継続することを決定。毎年定員20名を全国公募している。教育代表団の項に記載した中国国家漢弁と協議書に基づき実施している3つの事業のうちの一つ。2011年度は東日本大震災が発生したことから、募集の時期が例年より1ヵ月ほど遅くなったため、11名の参加にとどまった。	主催:中国教育部、文部科学省、中国国家漢弁、TJF 助成:在日本中国大使館教育処 研修機関:吉林大学
6	学習のめやす完成記念シンポジウムの開催 決算額:2,399,401円 (予算:1,719,638円) 増加理由:計画案を強化するため、パネリストに加え、企画協力者、ファシリテーター、記録者を依頼。これに伴い会議費・交通費、謝金増加	3/3	東京	「学習のめやす」冊子の発行を記念して、上智大学と共催でシンポジウム「未来(あす)を生きぬく外国語教育に挑む」を開催した。シンポジウムでは、これからの時代に必要な外国語教育とは何か、外国語を学ぶことそのものの意義や使命について参加者とともに考えた。同シンポジウムは、各国の言語教育推進を管轄する8機関の後援に加え、各言語をはじめ、関連分野の学会や研究会24団体の協力を得て実施した。 午前中は、「学習のめやす」の監修者である當作靖彦氏をモデレーターに、人材ビジネスに関わってきた橘・フクシマ・咲江氏、日中のコミュニケーションを円滑に行う活動を行っている可越氏、日本の英語教育政策に関わってきた吉田研作氏、千葉県立高校で校長を務めていた齊藤孝氏をパネリストに迎え、日本の外国語教育に対する問題提起と提言を行った。 午後は、「ネットワーク」「アドボカシー(決定権をもつ人々たちへの働きかけ)」「制度」「教育環境」の4つのテーマごとにグループに分かれ、日本の外国語教育が抱える課題を解決するための具体的な方策についてディスカッションした。最後に各グループの提案や提言を全体で共有し、これからの外国語教育の方向性、それに向かって一人ひとりが動き出す必要があるという共通認識が作られた。	主催:上智大学国際言語情報研究所、TJF 助成:かめのり財団 後援:外務省、経済産業省、文部科学省、在日本中国語大使館教育処、駐日韓国大使館韓国文化院、在日フランス大使館文化部、インスティテュート・セルバンテス、ゲーテ・インスティテュート、ブリティッシュ・カウンシル、国際交流基金、国際協力機構、日本私学教育研究所
7	外国語教育・多文化理解事業に関するネットワーク活動(定期事業) 決算額:1,075,109円 (予算:1,440,636円) 減少理由:JAKEHS西ブロック会合参加取りやめ、旅費交通費、会合費減少	通年	日本国内各地	高等学校中国語教育研究会(高中研)、中国語教育学会、高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク(JAKEHS)、朝鮮語教育研究会など、国内の中国語や韓国語をはじめとする外国語教育関連の研究会や会合等に参加し、情報交流を行うとともにネットワークの拡大を図った。 日中友好協会主催の「全日本中国語スピーチコンテスト」に国際文化フォーラム賞と副賞を授与するほか、在日中国大使館教育処や駐大阪中国総領事館教育室主催の「漢語橋世界高中生中国語コンテスト」の予選大会や、「話してみよう韓国語」地方大会高校の部、高等学校中国語教育研究会各支部主催の学習発表会に対して後援、協力を行った。 中国語や韓国語の講座が開設されていない学校に通う中高生に、両言語を学ぶ機会を提供するためISI国際学院、桜美林大学孔子学院、韓国文化院、拓殖大学第一高等学校が開講する中国語や韓国語講座を共催あるいは開講に協力した。	

公3 国内外の小中高校生間と教育関係者間の交流を促進する事業					決算額: 31,397,444円 (内、公3共通費用 17,553,855円)
事業名	実施時期	実施場所	事業内容	関係機関/団体	
1 世界の中高校生の交流プログラム「つながーる」の実施(定期事業) 決算額: 2,539,412円 (予算: 5,301,760円) 減少理由: アルバイト代減少、国内出張減少、2011年度はプログラムづくりに力点を置くことにし、サイト更新を行わなかったため、それに伴う謝金や翻訳代減少	通年	①TJFサイト ②大阪、沖縄、台湾	SNSを使った交流サイト「つながーる」には、国際交流に関心のある国内外の中高校生、日本で外国語を学習している中高校生、海外で日本語を学習している中高校生など、約20ヵ国から1,500名が参加している。参加者は、エッセイやコミュニティなどのコーナーに、複数の言語で投稿したり画像を発信するなどして交流している。2011年度は、国内外のICT (Information and Communication Technology)を使った交流学习や日本語教育の専門家6名のアドバイザーグループを結成し(「くりっくにつぼん」と共通)、適宜、助言や支援をうけた。中高校生がさまざまな背景をもつ人たちとコミュニケーションし、協働するプロセスを体験できるプログラム作りの一環として、沖縄県高等学校中国語教育研究会ICT国際交流学习部会に協力した。同部会は、沖縄の公立高校の中国語クラスを主体に大阪の私立高校と台湾の公立高校の協力を得た交流学习「異なる背景をもつ同世代とコミュニケーションする力、協働する力およびICTリテラシーの育成をめざした外国語教育のモデルづくりーSNS等を活用した実践研究」(パナソニック教育財団実践研究助成)に取り組んだ。このプログラムを通して、交流プログラムにおける「つながーる」の活用方法について研究した。		
2 日中の高校生サマーキャンプの実施(定期事業) 決算額: 10,814,095円 (予算: 10,007,977円) 増加理由: 中国の急激な物価上昇により、中国側運営費用が増加	7/25-8/3	中国長春市	中国国家漢弁は、世界の高校生を対象に「漢語橋高校生サマーキャンプ」を実施している。2007年度よりその一環として、TJFは「漢語橋: 日本の高校生サマーキャンプ」を企画・実施し、中国語を学ぶ日本の高校生92名と引率教師・事務局8名を含む計100名を中国に派遣してきた。「漢語橋」の5回めを実施するにあたり、同時期に同じ場所で日本語を学ぶ中国の高校生のための「日本語橋: 中国の高校生のサマーキャンプ」を中国側機関と共催し、日中の高校生がことばの学習だけでなく、共同生活や協働学習を行う過程で、ことばで表現する力、相手と意見を調整する力、新しい価値観を生み出す力などを身につけることをめざした。2011年度は、日本から90名、中国から46名の高校生が参加し、会場となった吉林省長春市の長春日章学園で一緒に寮生活を送りながら、中国語と日本語を学び共同活動に取り組んだ。参加者が学んだ中国語や日本語を実際のコミュニケーションで使うことを目的とし、中国の高校生が日本の高校生に長春市内の観光名所を案内したり、家庭に招待したりしたほか、最終日に実施する「サマキャン☆文化祭」に向けて、企画、構成、日中両言語での進行の台詞、会場設営などに取り組んだ。生徒の感想からは、共同作業に最初戸惑っていたが何とかコミュニケーションをとりながら格闘するうちに、ことばを学ぶ意味、伝えるためのコミュニケーションの新たな方法を体感するなど、それぞれの生徒に学びがあったことがわかった。	●日本の高校生サマーキャンプ 主催: 中国国家漢弁 実施: TJF 助成: 在日本中国大使館教育処、双日国際交流財団 後援: 外務省、在日本中国大使館教育処 協力: 文部科学省 輸送協力: ANA ●中国の高校生サマーキャンプ 主催: 吉林省教育学院・TJF 助成: 国際交流基金会北京日本文化センター、双日国際交流財団	
3 交流事業に関するネットワーク活動(定期事業) 決算額: 490,082円 (予算: 1,238,646円) 減少理由: よみうり写真大賞への協力のための翻訳作業を新たな翻訳者に依頼したため費用が減少	通年	日本国内各地	TJFが交流事業を推進していくためには、外国語教育、国際理解教育、異文化間教育、ICT交流等の分野における国内外の教師や専門家とのネットワークが重要である。海外に日本語教師として派遣された日本の小中高校教師を中心会員とした国際教育ネットワーク/REX-NETの活動に協力するほか、異文化間教育学会全国大会、日本国際理解教育学会研究大会をはじめとする各種の研究会やセミナーなどに参加し関係者とのネットワークを構築した。		

公4 TJF広報活動				決算額:18,136,778円 (内、公4共通費用 12,409,705円)
事業名	実施時期	実施場所	事業内容	関係機関/団体
1 機関誌『国際文化フォーラム通信』の発行とサイトの運営(定期事業) 決算額:2,652,165円 (予算:2,932,624円) 減少理由:年間4号のうち、2号(No.91,92)を内部執筆としたため原稿料や取材費が減少	4月、7月、10月、1月	日本国内、海外、TJFサイト	TJFの機関誌(A4判、2色、16頁、年4回、5,000部)。公益財団法人としてのスタートにあわせ、14年ぶりにデザインを刷新した。2011年度の特集テーマは以下のとおり。 第90号「学びを深める交流」(教師は学びを深めるために交流をどのようにデザインしているのか、子どもたちはどんな学びを得ているのかを実例を通して考えた) 第91号「小さな発見 大きな学び」(毎夏に実施している日本の高校生のサマーキャンプを取り上げ、参加した高校生は日々何を感じたり考えたりしているのかを紹介) 第92号「ことばは人をつなぐ」(高校の中国語と韓国語の学習のめやすが提案する新しい外国語教育を紹介) 第93号「ICT(情報通信技術)で変える学び」(教育現場に急速に浸透するICTを、どのように活用することが新しい学びにつながるのか実践例を通して考えた)	
2 TJFの事業報告と広報資料の作成(定期事業) 決算額:1,307,751円 (予算:1,172,915円) 増加理由:DTP担当スタッフの退職に伴い外部に作業を依頼	事業報告書 日:A4判、36ページ、一部カラー、8月発行 英・中:A4判、8ページ、一部カラー、8月発行 韓:A4判、8ページ、一部カラー、10月発行 『であい、つながる』:新書判、48ページ、11月発行	日本国内、TJFサイト	日本語版『事業報告』では、2010年度の事業全体の概観と各事業についての詳細な報告をまとめた。1,000部印刷し、関係者に配付。英語・中国語・韓国語版は事業全体の概観と主要データで構成し、各100部印刷し、2010年度まで作成していた三つ折リーフレットに替え、広報資料として活用した。4言語ともPDF版をウェブサイトに掲載している。 財団の広報資料として2010年度に新たに制作したカラーパンフレット(日本語版)を2,000部増刷し、積極的に活用した。 TJFの理念やミッションを、これまで事業を通じてであったエピソード7つでまとめた新書を2,000部発行し、これまでTJFの活動を支援してくださった方々に送付するとともに、TJFに対して理解を深めてもらうために配付した。	
3 TJFのウェブサイトの運営(定期事業) 決算額:1,767,157円 (予算:4,400,822円) 減少理由:Webサイト全体のリニューアルを2012年度に変更	通年	TJFサイト	新しいコンテンツとしてRingoウェブサイトと「学習のめやす」PRコーナーを設けたほか、TJFが主催するイベントの応募をこれまでのe-mailやFAXに替えてメールフォームから直接できるようにするなど、より多くの人がウェブサイトを訪問するような仕掛けづくりに取り組んだ。 2011年度はウェブサイト全体のリニューアルを予定していたが、各コーナーの新設を優先させたため、2012年度に実施することとした。	